

二次元ぷち文庫



# 美人双子の童貞鬪り

ボクだけの家庭教師

**試し読み版**

早瀬真人

表紙イラスト:ししよー

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『美人双子の童貞鬪り ボクだけの家庭教師』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



# 美人双子の童貞鬪り

ボクだけの家庭教師

早瀬真人

表紙 / ししょー

## 登場人物紹介

### Characters

---

やまざき み さ

#### 山崎美沙

美人双子の姉で名門女子大二年。艶やかな黒髪とつぶらな瞳をした、大人しくお嬢様風の女性。

やまざき り な

#### 山崎里奈

美沙の同い年の妹。明るい性格で、姉に比べると派手なタイプ。たっぷりした巨乳の持ち主で涼太にちょっかいをかける。

ふじかわりょうた

#### 藤川涼太

十五歳、童貞でお調子者の高校生。美人双子に家庭教師をしてもらうことになり有頂天になるが――。

澄みきった青い空が広がる五月の下旬、ここ藤川家<sup>ふじかわ</sup>では風雲急を告げる出来事が起ころうとしていた。

腰に両拳を当て、母親が目の前で仁王立ちをしている。藤川涼太<sup>りょうた</sup>は、不満そうにぷくと頬を膨らませた。

「家庭教師なんか必要ないよ！」

「何言ってるの！ この前の中間テストの成績は何？ ビリから二番目だなんて、恥ずかしいと思わないの！ 勉強もしないで、漫画ばかり読んでるからこういうことになるの！ あなたはもう高校生になったのよ。もっと自覚をもちなさい！」

母親の小言が始まったら、もう止まらない。最終的には、いつも閉口するしかないのだ。涼太は今年高校に入学したばかりの一年生で、確かに先日行なわれた中間テストは散々な結果だった。劣等生のレッテルを貼られても仕方のないような成績だったが、新しい学園生活に中々なじめなかつたことも影響していたのである。

たった一度だけの成績をみて家庭教師をつけるなんて、母親の言い分はあまりにも横暴としか思えなかつた。

「何を言ってもダメよ。もう家庭教師は頼んであるんだから」

「そ、そんな勝手なことして！ ひどいよ！ 僕、絶対ヤダからね!!」

憤然としながら涼太が答えると、それまで般若のような顔をしていた母親の表情がにわ

かに柔和になった。

「そうかしら？ きつとあんただって納得するはずよ。家庭教師はね、美沙ちゃんみさと里奈りなちゃんに頼んだの」

「え？」

美沙と里奈の名前が母親の口から飛び出し、涼太はぽかーんと口を開けた。

二人はとなりの家に住む山崎家の長女と次女で、双子の美人姉妹と近所でも評判の女子大生だったのだ。涼太自身は最近行き来しなくなっていたが、母親同士の仲がいいということ、子供の頃は彼女たちによく遊んでもらったものだった。

一人っ子の甘えん坊なだけに、こんなお姉さんたちがいたらなあ、と何度思ったことか。 「どうするの？ いやなら別の家庭教師を捜すけど」

ぼけっとしていた涼太だったが、母親のひと言ですぐさま現実に取り戻された。

冗談ではない。一度言い出したら、決して後には引かない性格の母親だ。暑苦しい男を家庭教師につけられたら、それこそ地獄の日々を送ることになってしまう。涼太は困惑げな表情を装いながら答えた。

「わかったよ。ちゃんと勉強すればいいんだろ」

「じゃ美沙ちゃんと里奈ちゃんでもいいのね？」

「ああ、仕方ないだろ」

7

釈然としない顔つきで踵を返した直後、涼太は満面の笑みを浮かべた。

自分の部屋に帰っても、二人と過ごす光景が頭に浮かんできて、期待感に胸が膨らんでしまう。

（美沙姉ちゃんたちは、今年で二十歳になったのか）

最近では道ですれ違っても挨拶を交わす程度の関係だったが、二人は美しさにますます磨きがかかり、すっかり大人の女性へと成長していた。

細い流麗な眉、黒目がちのつぶらな瞳、肌は白くてすべすべしており、唇はアメリカンチェリーのようにぷっくりしている。やや大きめのバストに蜂のようにキュッと引き締まったウエスト、ふっくらした腰回りがあまりにも色っぽく、ドギマギしてしまうほどだった。彼女たちの魅力は容姿だけではない。顔はそっくりなのに、二人とも正反対の性格をしているのだ。

姉の美沙は大人しくて控えめ、化粧品も薄く、セミロングの黒髪に艶があつて、いかにもお嬢様風の大人っぽい雰囲気を漂わせている。対して妹の里奈は明るくやんちゃ、服装や化粧品もやや派手で、髪にパーマをかけていた。

涼太の好みとしては姉の美沙のほうがタイプだったが、もちろん気を使わない里奈のことも大好きだ。

違ったタイプの美女二人に勉強を教えるなんて、こんなおいしいチャンスを逃

す手はない。

涼太は、二年前に近所の市営プールに行ったときのことを思い出していた。

ちやうど美沙と里奈もそのプールに来ていて、思わずびっくりしてしまったのだが、ピンクと黄色のビキニが眩しくて、まともに顔を見ることができなかった。

しばらく会わない間に、彼女たちの身長は一七〇センチ近くまで伸び、バストやヒップはふつくと丸みを帯びていた。足もすりと長く、よく見ると、彼女たちはプールサイドの男たちの視線を一斉に浴びていたのである。

「涼太君、一人で来たの？」

「え、ええ。そうです」

「じゃ、一緒に遊ぼうよ」

美沙と里奈に遊んでもらったのは、小学生の四年ぐらいまで。ゆつくりと話をしたのも実に四年ぶりのことだった。

涼太は現在でも身長が一六二センチしかなく、女の子と交際した経験は一度もない。もちろん童貞である。

両脇に美女二人を従え、プールサイドを歩いたときの優越感は忘れられない。おそらく周りからは、弟が親戚の子供だと思われていただろう。それでも涼太は大満足だった。



プールに向かいながら、涼太は横目で二人の身体に視線を送った。

ゆうに九十センチはあろうかと思えるほど、ふつくらしたバストも生唾ものだったが、くつきりとした胸の谷間の肌は鮮やかなほど白い。

先に水の中に入った涼太は、プール脇に備えつけられている小さな階段を逆向きに降りてくる里奈の下半身を見あげた。ツンと上を向いた柔らかそうなヒップと、ムッチリした太股が迫力あるアングルで目に飛び込んでくる。

あのバストに顔を埋めたい。ヒップで顔を押しつぶされたい。太股で顔を挟んでほしい。

淫らな妄想が頭の中を駆け巡り、涼太のペニスは水着の中でググッと鎌首を擡げはじめた。

美沙と里奈が入水すると、突然別の男性客がそばで飛び込みをし、激しい水しぶきが舞った。

「きゃっ！ いやん!!」

美沙と里奈に両脇からバストを押しつけられ、そのあまりの心地いい感触にペニスは完全勃起、涼太は顔をトマトのように真っ赤にさせた。

「もう、ひどい！ 涼太君、私たちも泳ごう」

美沙が華麗なフォームで泳ぎだしても、涼太はその場から一步も動くことができなかつ

かわからないわね」

確かに貼りつけてある写真は美沙と里奈の顔の部分だけで、髪はモデルのオリジナル写真をそのまま使っている。それでも涼太が何も答えないまましていると、里奈はゆつくりと立ち上がり、ヌード写真を机の上に置いた。

「ねえ、涼太君。私とお姉ちゃんのどっちが好き？ 返答次第ではご褒美をあげてもいいわよ」

「え？」

呆然としながら顔を上げる涼太だったが、里奈は怒っているどころか、微かな笑みさえ浮かべている。心臓の鼓動が高鳴り、ペニスがまたもや硬直を取り戻すと、涼太は無意識のうちに、「里奈ねえちゃん」と答えていた。

「本当に？」

熱病患者のように顔を火照らせながら、涼太はコクコクと頷き、そして上ずった声で言葉が続けた。

「り、里奈姉ちゃん、明るくて……なんか甘えさせてくれそうで、子供の頃から大好きだったんだ」

「ふうん、そう」

その答えに納得したのか、里奈はにっこり笑うと、視線を涼太の股間に落とした。

「涼太君っていけない子だよ。玄関で会ったときから、ちゃんと気づいてたんだから」  
里奈はそう言いながら床に跪き、ズボンのホックに手をかけた。

（え？ え？ う、嘘だろ！ これってホントのことなのか!?)

そう思いながらも、里奈の「ほら、腰を浮かせて」の言葉に、自然と身体が反応してしまふ。ズボンとパンツが膝下まで一気に引き下ろされると、完全勃起のペニスガバネ仕掛けのおもちゃのように弾け出た。

「きゃっ！ すっごーい!!」

初めて恥部を異性に見せるというシチュエーションもさることながら、憧れの里奈に弄ばれているという状況が異様な興奮を促す。

「皮被ってて、かわいいおチンチン。でもすごい大きいね。涼太君、もうりっぱな大人だよ」  
もちろん褒められて悪い気はしない。涼太が照れ笑いを浮かべると、里奈はすぐさまキヤミソールを脱ぎはじめた。

（あああああ!）

あまりの衝撃で言葉が出てこない。里奈はなんとノーブラ、いきなり見事な乳房を露にさせたのである。

なんでこんなにふつくらしてるんだろう。涼太は瞬きもせず、柔らかかそうなバストを凝視した。大きさといい、きれいな弧を描く形といい、美しい風景を見たときの感動にも

似た気持ちささえ起こさせる。

里奈は、よほど自分のバストに自信があるようだ。胸を張るように前方にグッと突き出すと、それはまるで誘いかけるかのようにフルフルと震えた。

「ふふ。約束どおりにご褒美をあげる」

里奈は上目遣いで涼太を見つめながら、唇を窄めて大量の唾液を真上からペニスに滴らせる。怒張が透明な粘液でまぶされると、里奈は両乳房の脇に手を添え、ゆつくりペニスに近づけた。

（ひよ、ひよっとしてパイズリ!!）

その光景を、涼太はまるで夢の中の出来事のように見つめていた。

里奈の乳房が、徐々に勃起したペニスに近づいてくる。

たわわに実った雪のように真っ白な巨房に、淡いピンクの小さな乳頭が愛くるしい。もちろん、母親以外の女性の乳房を生で見る経験は初めてのことだ。

まさか本当にこんな日が来るとは。まるでスローモーションを見ているかのごとく、涼太はその光景を網膜に焼きつけていた。

「美沙お姉ちゃんには内緒だからね」

里奈は最後に念を押すと、コチコチになったペニスを胸の谷間に挟み込み、両脇から優

しく包みこんだ。

「あ！ ああああああ」

ふつくらした温かい感触に、思わず顎が天井を向き、感嘆の溜め息が洩れてしまう。涼太は恍惚とした表情を浮かべながら、再び目線を下方に向けた。

剛直と化したペニスは、今や里奈の乳房の中へとすつかり埋没していた。わずかに亀頭の先端が、谷間の上方から見えるだけだ。

里奈は相変わらず上目遣いで涼太を見つめながら、ゆつくりと両手に動きを加えていった。搗きたての餅のような柔らかさと、唾液が潤滑油の役目を果たしているのか、ヌルツとした感触がなんとも心地いい。自分の指とは比較にならない気持ちよさだ。

「どう？ 涼太君、どんな感じ？」

「ああ。いい！ おチンチンが溶けちゃいそうです!!」

その言葉を合図に、里奈は悪戯っぽい笑みを浮かべ、徐々に手の動きを速めていった。メロンのようなバストを上下左右に揺らし、硬直したペニスを下から上へ、電動あんま器のように揉み込んでいく。

涼太は両足をつっ張らせ、切なそうな顔つきへと変わった。

できればこの快感を永遠に味わっていたい。もつともつと里奈と淫らな時間を過ごしたい。射精しなければ、さらにエッチな行為をしてくれるのではないか？

頭の片隅でそうは思っても、里奈のパイズリは童貞の涼太にとって、あまりにも刺激が強すぎた。とても長時間我慢できるはずもなく、自分の意志とは無関係に、射精願望は頂点へと導かれる。

「あんな変なことして。涼太君ってホント悪い子だよね」

「あああ。ご、ごめんなさい」

まるでおいたをした小さな子供をしかるように、里奈が優しい口調で咎める。それが甘えん坊の涼太には新鮮な刺激だった。

ニチャニチャと胸の谷間から淫靡な音が響き、それが性感をさらに沸騰させていく。涼太は堪えきれず、ついに苦しい声あげた。

「里奈姉ちゃん、ぼ、僕もう……」

「何？ イキそうなの？ いいよ、イッても」

里奈が手に力を込め、さらに両乳房をペニスの側面にギュッと押しつける。そして上下左右に激しく揺さぶった。

「あ……あ。き、気持ちいい」

滑らかできめ細かなバストの谷間が、肉胴全体にこれまで味わったことのない峻烈な刺激を与えていく。涼太の目はすでに虚ろな状態で、今にも蕩けそうな顔つきをしていた。

身体の奥底に溜まっていた欲望の塊が、逆巻くように突き上げてくる。涼太は会陰を締

めて堪えてみたものの、そんなものはまったく役に立たなかった。

恍惚の顔が、やがて苦悶の表情へと変わっていく。涼太はついに擦れた声で限界を訴えた。

「り、里奈姉ちゃん！ もうイキそう!!」

「いいよ！ たっぷり出してごらん!!」

里奈がさらに乳房を上下動させると、涼太は全身の筋肉を強ばらせた。

「あつ、イク！ イクううううううう!!」

「きゃあん！」

熱い迸りが、尿管を伝って飛び出ていく。一発目の射精は一直線に跳ね上がり、里奈の頬、額、そして髪にまで届いた。二発目、三発目も勢いはまったく衰えず、里奈の唇や顎を打ちつけていく。

「すごいわあ！ こんな初めて!!」

何度か間欠を繰り返したあと、涼太は頭をボーッとさせながら里奈を見つめた。

彼女は満足そうな笑みを口元に浮かべながら、唇に付着した精液を舌でなぞりあげている。

（里奈姉ちゃん、なんてエッチなんだ！）

その光景を見ながら、涼太は心の奥底に新たな欲望が生じはじめていることを実感していた。

問い質した。

「ちよつと遅れるって、ちゃんとメールしたでしょ！」

「と……届いてなかったです」

もしかすると、部屋を出た直後に着信したのかもしれない。蚊の鳴くような声で答えた涼太だったが、すぐさま破滅の光景が頭に浮かんだ。

覗きはりっぱな犯罪である。しかも他人の家に勝手にあがりこんでいるのだから、言い訳のしようもない。美沙と里奈の家庭教師は御破算、もちろん母親の耳に入れば勘当ものである。

恐怖に戦った涼太は無意識のうちに土下座し、心の底から懺悔した。

「美沙姉ちゃん、ごめんなさい！ 何かあったんじゃないかと心配で心配で、とても待っていられなかったんです。美沙お姉ちゃんのが、ずっと前から好きだったから！」

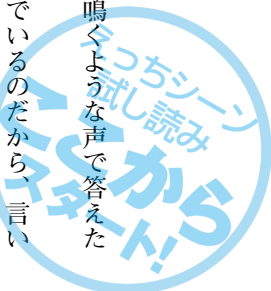
嗚咽混じりに謝罪すると、しばし沈黙のあと、頭の上からいつもどおりの美沙の冷静な声が聞こえてきた。

「涼太君……今言ったこと本当なの？」

「え？」

涼太が顔を上げると美沙は一転、やや困惑げな微笑で問いかけた。

真剣な思いが通じたのか、どうやら美沙の怒りは収まったようだが、昨日里奈に告白し





ているだけに、改めて問われると即答できない。

「本当に私のことが好きなの？ 里奈より？」

「は、はい！」

再度美沙に問いつめられ、涼太は思わず首を縦に振った。

あまりにも不誠実という気持ちはあるものの、涼太はどちらかといえば、淑やかな美沙のほうが好きだった。口から出た言葉は決して嘘ではない。

美沙はようやくくにこやかな笑顔を見せると、その視線を涼太の下半身へ向けた。

「ホントにしようがない子ね。涼太君、そんなに私の裸が見たいの？」

「え？」

このときの美沙は悪戯っぽい笑みを口元に浮かべていたが、それは里奈が見せたときとまったく同じものだった。

「見たいかって聞いているの。いやならいいんだけど」

美沙の言葉が、まるで媚薬のように全身に浸透していく。男の悲しい性なのか、涼太は本能の赴くままココクココクと頷いていた。

「いい？ これから私がすることは誰にも言っちゃだめよ。もちろん里奈にも内緒だからね」

その直後、美沙は裸体を隠していたバスタオルをそつと横にずらした。ちょうど目の高

さに、憧れのプライベートゾーンが曝け出される。だが両足がしっかりと閉じているため、肝心の部分まではよく見えず、涼太は四つん這いのまま顔を近づけた。

「涼太君、だめ。これで終わりよ」

美沙は再びタオルで身体を隠そうとするが、里奈のパイズリを経験したばかりの涼太がこれで納得できるはずもない。鼻息を荒げながら太股に抱きつく、美沙はバランスを失い、後方へと倒れこんだ。

「きゃっ！」

タオルが投げ出され、美沙が床に後ろ手をつく格好で腰を落とす。涼太が手の力を緩めると自然に両足が開かれ、眼前には秘めやかな恥肉が余すことなく曝け出されていた。

（ああああ！ 美沙姉ちゃんのおマ○コが!!）

生まれて初めて見る女性の秘園は、涼太に苛烈な衝撃を与えた。

慎ましく生えた恥毛の下に、ひっそりと息づく女陰。それはなんとも摩訶不思議な形をしていた。

ぷっくりと膨れた丘の中央にある二つの肉の帯がやや外側に捲れあがり、それは下方へ向かうにつれ、巻き込むように腔の中へ埋没している。内側のサーモンピンクの粘膜はしっとり濡れ、小さな頂上の尖りは、包皮のフードからまさに顔を出そうとしている最中だった。

秘肉の狭間はまるで赤貝の剥き身のようにだったが、色のくすみがいっさいなく、周りの肌が透き通るような桃色のせいか、決してグロテスクだという印象は受けない。

それどころか、何か胸を押しつぶされるような、妖しいざわつきを覚えてしまう。

「ちよつと!? 涼太君!」

「美沙姉ちゃん、お願い! あとちよつとだけ!」

美沙は慌てて足を閉じようとするが、涼太が泣きそうな顔で懇願すると、恥ずかしそうに目を閉じ、顔を横に向けた。

もつとじつくりと観察したい。触ってみたい。舐めてみたいー。

股間の中心部を凝視していると、そんな衝動が何度も突き上げてくる。相手が憧れ続けてきた美沙だけに、なおさらのことだ。涼太の肉筒は、今やズボンを突き破るかのように勃起していた。

頭の芯がじんじんと痺れ、白い靄が立ちこめたように意識が遠のいていく。やがて理性が崩壊し、ブレーキの壊れた本能だけが突っ走る。

我を見失った涼太は、思わず美沙のあそこにむしゃぶりついた。

「あつ、だめ! だめよ!!」

美沙が右手で涼太の頭を押し返そうとする。もちろん、こうなったらもう後には引けない。涼太は両足で踏ん張り、美沙の秘唇に舌をグッと伸ばした。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**